軽い気持ちで書いたのに（掲示板）

「リュウタ、シュートだ！」

今週末のバスケットの大会に向けて、二チームに分かれて俺たちは練習していた。今日は大会のメンバーを決める大事な紅白戦だ。

俺は、タブセ先輩からのパスを受けて、ゴールに向かった。さすがキャプテン、敵と味方の動きを読んで、一番有利な位置にボールを出してくれる。俺もここでゴールを決めて、週末の大会のスターティングメンバーに選ばれたい。三ポイントのラインからではシュートを外すかもしれない。もう一歩前なら確実にシュートできる。俺は一回だけドリブルをし、一歩、大きく前に出てシュートした。

「入れ！」

ボールが俺の手から離れたその瞬間、左から飛び出てきたコウジにブロックされ、ボールはコートの外に飛んでいった。

「ピピー！　フリースロー」

コーチのホイッスルで俺たちは動きを止めた。

タブセ先輩が俺に近づいて来て、話した

「リュウタ、落ち着いて確実に入れろ。」

息を整えて、シュート。一つ目を入れたが、二つ目を外してしまった。

練習後に、コーチが週末の大会のスターティングメンバーを発表した。

「タブセ、・・・　・・・コウジ、以上。今日の練習終了！」

俺の名前は呼ばれなかった。俺の代わりにメンバーに入ったのはコウジだった。前回の大会では選ばれたのになぜ？そう思いながら、コートにモップがけをしていると、タブセ先輩と笑いながら話しているコウジの姿が目に入った。

「つまんないな。」

家に帰っても、メンバーに選ばれなかったことが俺の頭から離れなかった。悔しい思いがこみ上げてきて宿題も手につかない。さっきから数学のノートを開いているが、一問も進まない。

ため息をつきながら、俺はコンピュータの電源を入れて、バスケット部の掲示板へのリンクをクリックした。今年になってから、俺たちのチームの誰かが開いた掲示板をみんなで使っている。たまに、地区内の他の中学校から変な書き込みがあるけど、そのときには、みんなで無視している。最新の書き込みの日時は、ついさっきの時間だ。

大会のメンバー発表。がんばるぞー。

おまえは、メンバーに選ばれたのか？

イエス、と言いたいところだが、俺はベンチから応援する！

誰なんだろうこんな書き込みをしているのは。俺は一人で笑ってしまった。

「これって、誰だかわからないな。」

そう思うと、軽い気持ちでキーボードに向かっていた。

コウジ、シュートがんばって入れろよ～

しばらくすると、次の書き込みが追加された。

おまえは、ベンチを暖めてろよ。

「なに！」
俺は、頭に血が上っていくのが自分でもわかった。

キャプテンの足を引っ張って邪魔するなよ、コウジ！

「そうだ、足！」
冷静さを失った俺は続けて書き込んでいた。

コウジ、高価なシューズはおまえなんかに似合わない。もったいない。

二週間前に、俺がほしいと思っていたバスケットシューズをコウジが履いてきたことを思い出して思わず書いてしまった。このときは、掲示板への書き込みが大きな事になるなんて思っていなかった。

次の日の練習にコウジは姿を見せなかった。
「コウジは欠席か？メンバーに選ばれたって、来なきゃ大会に出られないぞ。」
チームの誰かが話しているのを聞いて、俺もうなづいていた。

その次の日、担任のミカミ先生が朝の短学活で話をした。
「みんなは、インターネットの掲示板を知っているか？」
俺はその話にどきっとした。
「誰だかわからないと思って書き込みしないように。」
先生の話はそれで終わりだった。でも俺のドキドキは終わっていなかった。

短学活が終わるやいなや、同じクラスでバスケット部のアキラが俺の机のところに来た。

「リュウタ、先生の話って、バスケット部の掲示板のことだよ。おまえ、バスケット部の掲示板見たことあるよな？」
おれは、アキラの目を見ることができなかった。
アキラは話を続けた。
「昨日、コウジが休んだのは、掲示板に悪口を書かれたからだよ。あの掲示板、他の中学校も見ているようだからね。新しいバスケットシューズを買ってもらって、コウジ、喜んでいただろう。あのバスケットシューズはおばあちゃんに買ってもらったんだって。コウジはおばあちゃんが大好きだったからな。」
「俺、トイレに行ってくる。」
アキラの話を最後まで聞かずに、俺は教室を飛び出した。

「そんなつもりで、書いたわけじゃない。勢いで書いてしまったんだ。そんなつもりじゃない。」
心の中で何度も繰り返しながら、俺は教室に戻れずにいた。
「リュウタ、何してるんだ？」
廊下でミカミ先生に声をかけられたとき、俺は心を決めて、向き直って話した。
「先生、掲示板に書き込みをしました。」
俺を見ているめがねの奥の眼差しが厳しくなったように感じた。
「詳しく話してくれないか。」
ミカミ先生は俺を連れて相談室に向かった。

軽い気持ちで掲示板に書いてしまったことをミカミ先生に話した。
ずっとだまって聞いていたミカミ先生は低い声で俺に聞いた。
「掲示板に書かないで、コウジに話すことができる内容か？」
「いえ、できません。」

「リュウタは、ばれないと思ったから書いたのか？」
「・・・はい。」
「ずるいと思わないか思わないのか。」
俺は、ミカミ先生の言葉に答えることができなかった。
「掲示板は誰が書いたかばれない。と思っている人がいるようだが、実は書き込んだ人の情報が記録が残されている。ＩＰアドレスという情報をたどっていくと、どのコンピュータから書いたかわかる。さらに、書いた人の心には記憶として残っている。」
ミカミ先生は、俺の顔をのぞき込んで優しい目で話した。
「リュウタ。書いたことの意味と責任をいっしょに考えよう。」
「はい。」
俺は、ミカミ先生にうなづいた。